



## I N V I T A T I O N

山梨大学教育人間科学部

第 15 号

July. 10, 2005

---

### 「FDウイーク」始まる！

今年度初の試みである「FDウイーク」が7月4日（月）から始まりました。FD研修会では、これまで講義系科目を中心に行ってきましたが、今回は実技系科目を取り上げました。7月4日（月）4限目、木村はるみ氏による「体育理論及び演習」が学生会館多目的ホールで行われました。木村氏のご厚意で見学者も参加を許され、音楽を心でとらえ、体で表現する心地よさを体験することができました。参加者は教員、学生など24名で、授業終了後、木村氏を交えて意見交換を行いました。全体指導、グループ指導、全体での活動、グループワーク、グループ発表など変化に富んだ授業構成であったこと、言葉による抽象的な思考ではなく、学生が心で感じ、自分らしさを自然に表現できるよう、ひとりひとりの状態を見ながら細やかな配慮がなされていたこと、木村氏の表情や話し方がやさしく、思わず引き込まれてしまったこと、学生がそれぞれ楽しく実技を行っていたこと等の意見、感想が出されました。実技系科目は学生の主体的な参加が不可欠であり、また個人差も大きいことから、授業者の工夫が随所にみられ、非実技系科目担当者にとっても授業の本質を考えるよい機会となりました。快く授業公開を引き受けてくださった木村氏、そしてのびのびと実技を見せてくれた学生に心から感謝したいと思います。(TJ)

### FDウイーク公開授業（その1）：「体育理論及び演習I（表現運動・ダンス）」

〔授業者の思い〕 動くのではなくて、生きること：木村はるみ（保健体育教室）

この授業を受講する学生のほとんどはダンス経験が乏しく、体育を専門とした学生ではなく、さまざまな教科教育の学生である。回数は全6回である。この限られた時間数の中で、「踊っている感じ」をつかませたい、というのが授業のねらいである。

ダンスにとって、美しく伸びた手足や、ピルエット、高いジャンプや、決まったポーズなどのテクニックは、実は、ダンスのためのただの道具に過ぎない。しかし、その習得には、長期間のドリルが必要であり、とても授業内でおさまるものではない。ダンスにとって最も大切な事は何か。道具磨きではなくて、道具を扱う主体そのものをダンスへと導くことではないだろうか。

今回の授業では、生き生きと全身で音楽にのって表現する体験を重視した。まず、直線を「生

きる」、曲線を「生きる」ことをねらいとして、ランゲの「華の歌」をピアノに合わせて、前後左右の意識と動きを入れたフォームで動いてもらった。直線の力強さと曲線の柔らかさを目覚めと眠りの意識に対応させ、空間に自分の身体でフォームを誕生させる。

次に、短と長で時間を区切ることからリズムの生まれることを体験し、短—短—長のアナペストのリズムを動く（生きる）。そして、シューマンの「子どもの情景」の中の「ハッシュマン」をピアノに合わせて、外から中心へと向かう渦巻きの連続と音楽の流れを短と長で体験してもらった。フォームの体験と人間の内と外の体験、楽曲の語る何かを生きようとする気持ちから、小発表会へとつなげた。

このメソッドでは技術差や経験の差はほとんど出てこない、出てくるのはその人そのものの動きであり、それぞれの個性やパーソナリティである。だから、これは評価の対象外である。その人らしさを評価することなんてできないからである。自分の身体で自分にふさわしく語れる身体に気づいて欲しい。

### [授業参加者の感想] 学生アンケート結果

今日の提案ではどのような点が工夫されていましたか。

- ・リズムをとるのにピアノを使っていた。頭で考えるのではなく体で感覚で動くようにしていた。
- ・静と動が意識されていたように思いました。体を動かす→聞く→体を動かす（繰り返し）というふうに授業が進められました。
- ・何度かグループで相談する時間がとられていて、教師からの一方的な指導ではなく自分たちで作りに上げていく点。
- ・目標が曲想を感じつつ、手やイメージを使いながら、よりわかりやすく提示されていた（言葉がけのみではなく）。生徒の動きを見つつ、またアドバイスをしつつやっていくことにより、戸惑う生

自分の授業に生かせる点はどのようなことですか。

- ・協調性を養うことができる取り組みだった。
- ・班ごとに発表する場を設けて、お互いの表現を鑑賞する点。一人一人の表現を尊重している点。
- ・先生が笑顔。リラックスした雰囲気づくり。
- ・先生の笑顔と優しい話し方。練習→練習→発表という流れ。
- ・一人一人の状態をみて、判断している。失敗をおそれないように工夫している。
- ・実践をしたあとでグループで話し合いの場を設けていたこと。頭で考えるのではなく体で感じて表現するという点。
- ・みんな笑顔でとても楽しそうにしていた。楽しみながらやっている様子がよく見られた（ダンス時）。個人個人の動きをしっかりと見ていて、

徒もみんなと一緒に動いていたように思う。

- ・外の天気に合わせて楽曲を決める。
- ・グループでグループ名をつけて授業を進めている点。グループを組むことで理解しやすくなっている。
- ・大学生になって表現をするのは恥ずかしいと思って動きづらいと思うけれど、そう思わせない点が工夫されていた。
- ・先生が実際にピアノの生伴奏をしているのがとてもよかったです。まちがっても大丈夫、自分のやりたいように、気持ちよくというところに重点が置かれていた。

全体も見つつ、個も見ている。

- ・頭で考えるのではなく、体でイメージする。
- ・授業の運び方（段階に分けて授業を行う）。



お気づきの点を自由にお書きください。

- ・みんなが楽しそうに授業を受けていた。
- ・同じ曲、同じ振りでも一人一人の表現が異なることに驚きました。
- ・ユニークな授業で自分も一緒に踊りたくなるような授業だった。
- ・自然に体が動き出しそう。
- ・先生の表情がすごくよくて、こっちまでひきこまれそうになる。体で表現するのは気分もすっきりしてすごくいいだろうなと思った。
- ・とても体が落ち着く感じがしました（何か体にジーンとくるものがありました）。音楽を聴いて体で表現するというのはすごく素晴らしいことだな

と思いました。

- ・頭を使わず、体で自分らしさを表現するというのはいろんな意味でほぐされるなあと感じました。柔軟だけれど繊細な授業だと思いました。
- ・恥ずかしがっている人にはどのような指導がいいのか。実際、恥ずかしそうに踊っている人がいたが・・・→あまりにわからない人がいたら個人指導、グループでの話し合いを織り交ぜて羞恥心を取り除く。評価の仕方→まだわからない。
- ・以前、この授業を受講していましたが、やるのを見ていたのでは違いました。やった方が楽しいですね。(TM)

## FDウィーク公開授業（その2）：「合唱 I」

[授業者の思い] 授業の進め方：片野耕喜（音楽教室）

「発声＝身体（小宇宙）と環境（大宇宙）の共振」などと大風呂敷を広げたようなタイトルで授業をしましたが、でもほんとうに和音の力を通じて、学生にハルモニアを感じて欲しいと思って日々努力しているのです。

心の静寂・耳の準備

和声の感覚取得と発声準備

旋律（個体の響き）と和声（共鳴）の関係

合唱を通じてハーモニーへ

そのために、いろいろなすべき事があるのですが、そもそも音楽を奏でる前提条件として「静寂」がないことと「心に落ち着きが無い」ことが音楽学生には良くあるのです。音を出すのがわれわれの仕事なのに、閾値が常に高いままの状態であることが往往にしてあります。それで、私は授業の最初は呼吸法と簡単な気功から入ります。これにより、全員が黙して呼吸するだけの静謐な環境と、心拍数が下がって集中力と心の平安が増すのです。これはとても大事なプロセスです。

次に、学期を通して繰り返し導入に使っている素材（きらきらぼしの四声体）を用いて基本三和音と、7音の連続による和音の訓練を行いました。この曲は不協和音の多い、ジャズの要素を多く含むもので、楽しみつつ和声感覚を養うことができます。

次の段階では、和音感覚のみならず、リズムと「掛け合いの要素」の要素を加えます。このためには「カノン」が最適です。なぜなら旋律としての「個」と、共鳴体となったときの「合唱」が同時に、順を追って体感できるからです。しかもその日の私の「気まぐれ」によって、各声部のメンバーを入れ替えるため、学生にはほどよい緊張感が残り、先の課題できらきらぼしの旋律しか歌っていなかった学生の何人かは、主旋律のみならず副旋律に取り組むことによって頭の体操になるのです。

これが終わると実際にいくつかの合唱曲に取り組み、ハーモニーを楽しむのですが、今回選んだ曲（「緑の森よ」「はるかな友に」）では、歌い出しがユニゾンになっている曲を選びました。これにより単線から複線になった瞬間の感動を感じてもらいたいがありました。

最後に、この日に仕上げるために前週から用意していた「Jupiter（ホルストの惑星から）」の編曲をうたいました。ちょっとタイトルを意識して選んだのですが、最近のヒット曲でもあり学生の反応はとても良かったように感じました。この編曲はコーダが凡庸であったため、習熟度の高い学生にあらかじめコーダを編曲してくるよう課題を出しておき、それに自分で手を加えて、

壮大な二重アーメン終始の終結部に作り変えました。すこし遊びの要素をと、カデンツに映画「未知との遭遇」のテーマ re, mi, do, do, so を散りばめ、自分が今何の音を担当しているのか明確に理解させるため、コダーイのハンドサインを教えて、歌うのと同時にサインを出させました。この学生たちは、音そのものは非常に速く取れるし、譜面からすぐ音が浮かんでくるので、これくらいストレスを与えた方が彼等の能力の訓練になると思っています。

シンコーションでは少しドライブして「ノリノリで」指揮し、パートソロでは「おだてて」どんどん歌わせ、自意識を高めて曲に集中させるよう心配りをしました。

この場をお借りしてこれを読んでくださった方をお願いいたします。「合唱」は教免必修ですが、一年生の5-6人でやっているため、合唱の形態になりません。女性が圧倒的に多く、混声合唱にもなりません。私のゼミ生を配置してようやく形にしているのが現状です。ですから歌が好きな方はぜひ遠慮無く金曜4限においていただきたいと思います。大歓迎です。

### 〔授業参加者の感想〕「合唱Ⅰ」の授業から学ぶ理論と実践の融合：澤登義洋

南アルプス市教育委員会から山梨大学に着任して3ヶ月が経ちました。約30年ぶりの母校に、それも教える側となって戻ることになろうとは予想もしておりませんでしたから、戸惑いながらのスタートとなりました。そのような私にとって、学部FD委員会は、力強い存在です。着任早々の「初任者懇談会」や今回のような「FDウィーク授業公開」といった研修は大変に助かります。実は、個人的にも他の先生方のご厚意で授業を見せていただきましたが、はるか昔の大学の授業とは異なる点も多く、学ぶところ大です。たとえば、今回の片野先生の授業でも、教師からの一方的な指導ではなく、学生の考えを適宜取り入れた双方向のやりとりがあり、無理のない自然な進め方がなされていました。特に、理論上の和声と実際の声で生み出される和声の響きの違いを合唱という体験を通して感じ取っていく手法は、理論と実践が見事に融合され、とても印象的でした。教育における理論と実践の融合は、私の授業にとっての今後の大きな課題でもあり、貴重な示唆をいただくことができたと思います。私も音を楽しむことは大好きですので、片野先生の授業に引きつけられ、一緒に合唱をしたくなりました。片野先生、学生のみなさん、素敵な歌声を聴かせてくださってどうもありがとうございました。また、企画をしてくださったFD委員会の皆さん、本当にありがとうございました。

### 「FDウィーク」終わる！

「FDウィーク」の最終日である7月8日（金）は、L号館527教室にて片野耕喜氏による「合唱Ⅰ～発声＝身体（小宇宙）と環境（大宇宙）の共振～」の授業が行われました。この授業は音楽教育講座1年生の必修科目ですが、混声合唱となるように、大学院生などいろいろな学年の学生11名が参加していました。大変になごやかな授業で、難しい理論も、片野氏がユーモアを交えながらわかりやすく説明され、楽しく進みました。まず、授業参加者も一緒に、ストレッチをしながら体をほぐし、「心の静寂・耳の準備」を体験しました。ゆっくりと静かな呼吸の中で行われたストレッチは、初回の木村氏の授業と共通するものがありました。次に、発声を兼ねて4声で歌われた「きらきらぼし」では、ハンドサインも使いながら和声の感覚をとらえ、「共振の準備」を行いました。次に3つのパートが追いかけながら歌うカノンがありましたが、これは旋律と和声（共鳴）の関係を楽しく学ぶことができるもので、合唱の導入として有効だそうです。最後に、「緑の森よ」、「はるかな友に」、「ジュピター」の合唱を聴かせていただき、「共鳴による心の交感」を味わうことができました。当日は、学生、教員、内地留学生等7名が参加しました。合唱の授業が楽しく展開できるよう、教材や授業構成の工夫をしながら、学生と共に授業を創り上げるプロセスを見せていただきました。このような貴重な機会を設けてくださった片野氏、美しい歌声を聴かせてくださった学生の皆さんに心から感謝したいと思います。(TJ)

